第二次世界大戦後における名所広島城のバス観光案内と観光景観の変容 THE CHANGE PROCESS OF THE SIGHTSEEING BUS TOURS AND THE LANDSCAPE OF TOURISM OF HIROSHIMA CASTLE AS THE FAMOUS PLACE AFTER THE SECOND WORLD WAR

横山 尚*, 千代 章一郎**
Hisa YOKOYAMA and Shoichiro SENDAI

This paper aims to clarify the change process of the landscape of tourism of Hiroshima Castle as the famous place after the Second World War. Analyzing the guide texts of the sightseeing bus tours and the interview to a person who experienced bus tour guide, we can find out that the history of the castle in the military city is more emphasized than the present castle as the public park in the guidance of recent years. The meaning of Hiroshima Castle as the famous place was limited to the place guided about the definite history with the view from the outside of the castle.

Keywords : *Urban landscape, Landscape of tourism, Famous place, Sightseeing bus tour, Hiroshima Castle, The Second World War*

都市景観、観光景観、名所、定期観光バス、広島城、第二次世界大戦

1. はじめに

1-1. 研究の主題と目的

本稿では、都市のアイデンティティの形成や持続の問題を考察するために、広島市における古くからの名所である広島城に注目し、定期観光バスでの観光案内によって形成される観光景観の変遷を明らかにする(図1)。

広島市には、第二次世界大戦以前、東照宮や神社、縮景園、広島城などの名所旧跡が幾つか存在し、観光地となっていた。しかし、昭和20年の原子爆弾投下により、それらの名所は焼失、倒壊した。その後、広島市は戦後復興を経て、「国際平和文化都市」と称され、観光施策の中に位置づけられていった¹⁾。都市観光における観光案内の対象となる場所の選定や案内内容は、都市のアイデンティティの一端を示すと考えられるため、本稿で都市観光、特に都市の全体像を広く案内する定期観光バスに着目した²⁾。

前稿³⁾では、広島城と同様に広島市の古くからの名所であり、市街地周縁部に位置する比治山を取り上げ、環境変化と観光景観の変化から場所の意味の変容を考察した。それに対し本稿では、比治山と同じように古くからの名所であると同時に、都市のパノラマ景眺望地点であり、また原爆投下により歴史を断絶された場所として広島城を取り上げる。しかし、広島城は比治山との類似点があるものの、市街地内部に位置することなどから都市の見え方、被爆後の整備手法、場所の意味が全く異なる場所である。

第二次世界大戦後の広島城を主題とする研究は殆どなく、江戸期毛利、浅野時代の広島城の修復について取り上げたものがあるのみである⁴⁾。また、全国の城については、明治期における城やその周辺の利用についての研究が幾つかみられる⁵⁾。その他、戦後の全国

的な城郭の復元の経緯について言及している研究がある⁶⁾。しかし、広島城に特化した研究はなく、全国的な開発・保全・修復の類型について言及しているのみである。これに対して本稿では、広島城についての観光案内の変遷を分析することによって、それによって形成される観光景観について明らかにすることで、都市の全体的なイメージ形成の一端を明らかにする。

1-2. 研究方法

本稿では、昭和37年、48年、57年、60年、平成3年、11年発行ガイドテキスト⁷⁾、バスガイド退職者に対するインタビュー調査(平成15年10月19日、平成16年3月10日、平成18年4月22日実施)聴取データ、バスガイド案内資料としての新聞記事の切り抜き資料(昭和59年～平成14年)⁸⁾を一次資料として用いた。また、昭和

図1 広島定期観光バスにおける主要観光案内対象(筆者作成)

* 広島大学大学院工学研究科社会環境システム専攻
大学院生・修士(工学)

** 広島大学大学院工学研究科社会環境システム専攻
准教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School, Hiroshima Univ., M. Eng.

Assoc. Prof., Graduate School, Hiroshima Univ., Dr. Eng.

29 年定期観光バス事業開始年から最も古いガイドテキストの発行年である昭和 37 年までの案内内容については、バスガイド退職者（昭和 29 年～35 年乗務）へのインタビュー聴取データにより補完した⁹⁾。一次資料の収集は広島バス株式会社¹⁰⁾にて行った。

その他、上記の資料について整理、分析を行う際に、基礎的な資料として、地形図や住宅地図¹¹⁾、景観写真¹²⁾も同時に用いた。

本稿では、初めに広島城とその周辺の環境変化と場所の意味の変化について概説した(2.)上で、広島城周辺での広島定期観光バスの運行系統の変遷(3.)、観光案内内容の変遷を景観形成の観点から整理し(4.)、考察を加える(5.)。

2. 名所広島城とその周辺の施設整備

広島城とその周辺の環境変化について、行政による施設整備や市民との関わりの変化の点から整理する。広島城の場所の成り立ちに関連する歴史年表は表 1 に示す通りである。広島城に関連する歴史については、『広島城四百年』(中国新聞社編、1990.5.1)においてまとめられているが、戦前についての内容が多く、戦後の広島城の整備に関わる内容は詳細には書かれていない。したがって、写真集や広島護国神社の復興史、天守閣での企画展示パンフレットなど¹³⁾を用いて、景観変化の要因となる内容も含めて、断片的な事実を加えて再編した。

日清戦争の際、「廣島の政治上・軍事上・人口上の重要な国家的地位と海陸交通の要衝として当事我が国最西端に位置して居た」¹⁴⁾ことにより、広島に明治 27 年明治天皇が全軍を指揮するための大本営が城内に置かれ、またその場所は「戦時色の深まりを最も端的に示す場」¹⁵⁾となった。

昭和初期、広島城の外郭だった場所は、終戦まで西練兵場と呼ばれる広大な広場であり、第五師団が教練に使っていたが、軍の許可を得て、二回の大きな博覧会や物産共進会、建国祭や広島国民大会

などの催しが次々と開かれた。広島城天守閣や県物産陳列館（原爆ドーム）で関連行事が行われることもあった。これらのうち、最初の昭和産業博覧会は不況の打開策の一環として企画されたものであり、全国的に開かれたものであったが、それ以降のものは軍国主義高揚のための催し（戦艦や兵士の遺品、戦利品の展示など）であった。昭和 6 年には、天守閣内で戦利品の展示を行うなど、記念展覧会が開かれた¹⁶⁾。伝統的な祭りは精彩を欠いていった反面、毎年十月には「広島招魂祭」という戦没軍人を祭る大規模な祭りも開かれていた¹⁷⁾。

いずれにしても、広島城は市民にとってなじみ深い場所であったが、天守閣の使用に注目すると、上記の博覧会などの会場となった他、昭和 20 年には兵舎不足のため、天守閣内部を一時兵舎として使用し、戦局が激しくなるにしたがって、本丸内にも軍事施設が建設されていった。

第二次世界大戦後、広島市では広島城周辺の広い軍用地の利用などの復興計画が進められる一方で、広島城に関しては、広島市復興審議会で発表された都市計画案の一つとして、官庁、学校街とする案が出た他、広島城無用論や内堀埋め立て論などの議論が起こった。その中、昭和 26 年には、「第六回体育文化博覧会」のシンボルとして仮設の天守閣が木造で復元されるが、これは同年には壊される¹⁸⁾。しかし、この仮設天守閣への眺めがよく、市民に高評価であったことと全国での天守閣の復元ブームが契機となり、「広島復興博覧会」を機に、昭和 33 年に天守閣が鉄筋コンクリート造で再建され¹⁹⁾、城下町の形成を示す史料を展示した「郷土資料館」となる²⁰⁾。原爆投下前は城の南に広がる西練兵場の西端にあり、原爆投下により鳥居を残して全焼した広島護国神社（戊辰の役、日清、日露戦争以降の戦争犠牲者を祀る）が、昭和 31 年に本丸内の南西部分に移転新築される。この広島護国神社は県内でも特に初詣客数の多い神社であり、またその他の祭りや七五三などの行事も行われている。昭和 40 年以

表 1 広島城とその周辺の施設整備年表（筆者作成）

年号	西暦	施設整備内容
天正17年	1589	毛利輝元により、広島城が築城される。
明治 4年	1871	廃藩置県。県庁が広島城本丸に置かれる。鎮西鎮台第一分営が広島城本丸に設置され、県庁は三の丸へ移る。
明治 5年	1872	広島城の門や櫓の解体が始まる。
明治 8年	1875	広島城内に練兵場が初めて設置される。
明治22年	1889	宇品港が竣工される。
明治27年	1894	大本営が広島城本丸内へ移される。
明治44年	1911	広島城外堀の埋め立て工事が行われる。
昭和 4年	1929	旧広島城内の西練兵場を中心に昭和産業博覧会が開催される。
昭和 7年	1932	西練兵場などで時局博覧会が開催される。
昭和20年	1945	広島に第二総軍指令部が置かれる。原子爆弾によって広島城の天守閣、太鼓櫓、表御門などが壊滅する。
昭和24年	1949	広島平和記念都市建設法が公布される。
昭和26年	1951	広島城跡で、第六回国民体育大会の協賛行事として体育文化博覧会が開かれ、木造の天守閣が復元される。
昭和28年	1953	内堀を含む本丸・二の丸が広島城跡として国の史跡に指定される。
昭和29年	1954	広島バス株式会社によって定期観光バス事業が開始される。広島城での下車案内が行われる。
昭和31年	1956	広島護国神社が広島城本丸に移転、再建される。
昭和33年	1958	広島復興博覧会が開催される。広島城天守閣が鉄筋コンクリートで復元され、郷土資料館としてオープンする。
昭和40年	1965	広島城の堀と石垣の大改修が行われる。天守閣の西、北、東に桜が植えられる。
昭和43年	1968	定期観光バスのコースにおいて、天守閣への入館が廃止される。
昭和44年	1969	堀の水の汚染が進行し、大量の鯉が死ぬ。水を干して、水もれを防ぐセメント工事などの補修工事が行われる。（工事以前は、堀は蓮根で埋めつくされ、水がない状態が続いており、その後水を張ったが水質汚染により、この工事に至る。この工事以降、堀には水が張られることとなる。（～1970））
平成元年	1989	広島城天守閣で築城四百年記念式が行われる。二の丸の復元工事が始まる。
平成 3年	1991	表御門、御門橋復元工事が完了する。
平成 5年	1993	堀川浄水工事が完了する。広島護国神社の本殿拝殿を始め、儀式殿や石鳥居、石畳に至る諸工事が完了する。
平成 6年	1994	平櫓、多聞櫓、太鼓櫓、西側の堀復元工事が完了する。

降、広島城本丸とその西側と南側の地域を含めて「広島中央公園」とされ²¹⁾、それに伴い本丸と周囲の整備（堀の浄化工事、石垣の改修、桜の植樹など）が行われる。年代は定かではないが、この時期以降に広島城内では花見や写生大会などの行事が行われるようになった。平成元年以降、築城 400 年を機に城内の二の丸などの諸施設の復元工事を始め、松や桜や芝による植栽計画やライトアップなどによる景観計画、動線計画、施設計画、管理計画が進められる（「平成の築城」、平成 6 年完了）²²⁾。また広島城の周辺では、本丸の南側の市街地中心部において、建物の高層化が徐々に進む。また西側には大規模な公営高層集合住宅の建設が進み、天守閣からの眺望は徐々に遮られていく。

以上のように、広島城は為政者にとって、戦時中は軍都広島を中心であった場所であったが、戦後、本丸とその周辺を広域な公園とする計画を行い、文化施設と行政機関の集合する地域、本丸内は自然、江戸期の歴史を示す場所として、大きな変化を遂げた。つまり、為政者にとっての広島城という場所の意味は、戦争、原爆投下によって断絶したといえる。

一方、市民にとっての広島城は、戦時中においても軍主催の博覧会などの催しに参加する場所として、市民生活に関わる場所であった。戦後は、催し物の主催者が護国神社や行政に変わり、軍事色はなくなるものの、戦時中と同様、戦後の広島城もまた市民生活に結びついた市民的な行事が数多く行われる場所である。つまり、市民にとっての広島城という場所の意味は、市民生活と結びつきを持つ場所として、場所の利用の形態という点で戦前から継続されている。

3. 広島城とその周辺の運行系統の変遷

広島定期観光バスの運行系統については、筆者らの先行研究²³⁾において分析、整理を行い、言及をしているが、それらは広島市全体での運行系統であり、広島城に関連する部分は広島城での下車案内の有無や、広島城の近くを経由したかどうかということのみを分析の対象としてきた。したがって、広島城の周辺の運行系統の詳細な変化については言及してはならず、初出の事項である。

広島城内と城周辺の運行系統の復元図については、ガイドテキストが現存しない、定期観光バス事業開始の昭和 29 年以降昭和 37 年までの運行系統については、当時のバスガイドにインタビュー調査を行い、運行系統の復元を行った。また、昭和 37 年以降のガイドテキストが現存する年代に関しては、ガイドテキストの発行年ごとにガイドテキストの内容から推測した後、バスガイド退職者にインタビュー調査を行い、確認をする作業をし、地図中に記入して作成した。また、バスガイド経験者が入社前の昭和 37 年のルート図については、昭和 48 年のルートをもとにガイドテキストの内容から推測して作成した。広島城とその周辺の運行系統の変化を表 2²⁴⁾に示す。

昭和 37 年には、バスを本丸内で乗り入れ、駐車場で乗客は下車し、歩いて城内施設の案内を受けていた。また天守閣などの自由見学の後は、再びバスに戻る。しかしその後昭和 43 年には、観光客や幹旋業者の要望により、コース全体の時間短縮が必要となり、天守閣入館を廃止し、下車案内から車中案内に変更される²⁵⁾。そして、昭和 48 年には、内堀の外の道路でバスを停車させ、車内から天守閣を見ながら案内していた。このときには、本丸の南東側での案内であったが、昭和 57 年以降平成 11 年までは天守閣に近い、本丸の北

側での停車案内へと変更される。その運行系統の変更要因として、天守閣の西側の大規模な公営高層集合住宅（昭和 33 年建設開始、昭和 51 年完成）、本丸の南西側の市立中央図書館（昭和 49 年完成）、ひろしま美術館（昭和 53 年完成）の建設により、案内対象物が新しいルート沿いに増えたことによると考えられる。その案内地点の変更により、昭和 57 年以降は昭和 48 年の運行系統と異なる道順で、より長い距離で本丸外の道をバスが走ることとなった。また、平成 11 年以降は、ひろしま美術館にて下車、入館が開始されるため、平成 3 年に再建された二の丸の近辺は通過せず、やや南よりの道路を通行するようになる。

以上のように、昭和 37 年の本丸内での下車案内（写真 1²⁶⁾ 参照）から、昭和 48 年以降に内堀外での停車案内へと変更されたことにより、観光客内施設を見ることができず、天守閣を外側から眺めるのみとなった。しかも、昭和 57 年以降は写真 2 のように天守閣のみを近くから見ることとなった。つまり、広島護国神社や軍都広島を中心であったことを象徴する大本営跡を眺めることなく、また天守閣の内部が郷土資料館となっていることを見ることもできず、観光客は建築物、形としての天守閣の外側のみを見て広島城と認識するのである。

写真 1 昭和 37 年の案内地点から天守閣への眺望(昭和 33 年撮影)

写真 2 昭和 57 年以降現在までの案内地点から天守閣方向への眺望（筆者撮影）

4. 広島城の観光案内の変遷

広島城に関連する観光案内について、年代別、案内対象物別にガイドテキストとバスガイド退職者へのインタビュー聴取データより抜粋し、整理を行った（表 3-1、3-2²⁷⁾）。

広島城に関連する案内内容は、その案内対象により、広島城全体（築城経緯／毛利、福島、浅野時代の広島城の様子／原爆による被害）、広島城本丸・二の丸（通信司令室／大本営跡／広島護国神社／内堀の石垣、天守閣／天守閣のみ／二の丸）、広島城内堀（内堀／内堀の整備）、広島城周辺（西練兵場）の四つに大別される。

これらの案内内容をまとめた表 3 から、観光案内内容の変遷について以下のことがわかる。

1) 戦後以降現代までの時期における天守閣についての案内の簡略化：平成3年以降には、それまでは説明されていた、天守閣の復元工事の詳細な内容や現在の郷土資料館という用途や展示内容などの項目が省略され、案内内容は天守閣が復元されたことのみとなる。

2) 築城時代、軍事施設時代の継続的な強調：毛利時代の築城の経緯やその後の江戸時代の城主について、また日清戦争以降第二次世界大戦中に広島城に置かれた軍事施設や、その軍都を象徴する場所としての広島城の様子について、どの年代にも特に詳細な案内がされている。

3) 天守閣からの眺望についての案内の省略：昭和29年～35年には、バスガイドが観光客と天守閣に入館し、天守閣から眺めながら、眺望対象物（原爆ドーム、宇品港、西練兵場）（写真3、4²⁸参照）についての案内をしていた。しかし、昭和37年には天守閣に観光客のみ入館するが、最上階からの眺望についての案内はされない。さらに昭和48年以降には、天守閣への入館も省かれる。このことは、バスガイドがガイドテキストの案内内容に時事的情報を補足するために用いていた新聞記事の切り抜き資料の中にもみられる。この切り抜き資料は昭和59年から収集されたものであるが、この新聞記事の中には天守閣を含めた本丸内での行事や天守閣内部での展示内容、発掘などにより発見された歴史などが多く含まれているが、天守閣からの眺望に関わる内容（例えば、天守閣からの眺望阻害問題や天守閣から撮影した本丸内や市街地の俯瞰景の写真を用いる、などが考えられる）はわずかである。

つまり、戦後以降現代までの広島城の歴史については平成3年以降説明されなくなるが、築城時代、軍都時代の歴史については、継続して説明される。しかし、都市全体を眺める天守閣からの眺望についての説明は、昭和37年という戦後早い段階で失う。

写真3 昭和29年～35年の案内地点から市街地（南東）方向への眺望（昭和36年撮影）

写真4 昭和29年～35年の案内地点から市街地（南）方向への眺望（昭和36年撮影）

表2 広島城とその周辺の施設と観光案内ルートの変化（筆者作成）

（凡例：.....運行系統 ○ 案内地点 ■ 新設施設 ■ 既存施設 ()内の年号は建設年

ルートと主要施設	昭和29～35年、昭和37年	昭和48年	昭和57年
テキストの作成年	昭和29～35年、昭和37年	昭和48年	昭和57年
ルートと主要施設	昭和60年	平成3年	平成11年
テキストの作成年	昭和60年	平成3年	平成11年

表 3-1 広島城関連の観光案内内容の変遷（筆者作成）

案内対象 内容項目	広島城全体				広島城本丸、二の丸	
	築城経緯	毛利、福島、浅野時代の広島城の様子	原爆による被害	通信司令室	大本営跡	広島護国神社
案内内容の示す時期による分類 前:原爆投下前、中:原爆投下時、直後、後:原爆投下後	前	前	中	中	前中後	前中後
昭和29年～35年 (昭和37年発行ガイドテキストと異なる部分のみ、バスガイド退職者へのインタビュー聴取データより抜粋した。昭和37年と同様の案内内容部分は簡略化している。)	(昭和37年と同様の案内内容)	(昭和37年と同様の案内内容)	(昭和37年と同様の案内内容)	防空壕の説明もあったんですよ。今の護国神社の正面鳥居のところが、ここからぼつと入った左側、RCCの方から入ったら左側、今の駐車場の方から入ったら、門を入って来たら、やっぱり左側、通信司令室ね。原爆が落ちたって第一報を知らせた場所ね。	大本営の跡案内して、お城に上がって… (昭和37年と同様の案内内容)	ここが護国神社ですよ、護国の歴史が記ってあるところですよ (昭和37年と同様の案内内容)
昭和37年	天正十七年(今から三百七十年前)毛利輝元公は、祖父元就公の命を継ぎ、中国九十九国の大宰にふさわしい城を造ろうと高田郡吉田郡山城から、当時五ヶ村と呼ばれていたこの地に移り、叔父小早川隆景と共に築城を計画されました。黒田如水が設計し、二宮健兵衛が築城奉行となり、着工後三年目の天正十九年正月竣工、入城し、広島城と名付けたのでございます。	五層、三十六米の天守閣、太鼓櫓と三つの城門を始め、大小高低の御殿舎は、いらかを運ぶ、白壁に映えて、そびえ立つ様は、それは豪華なもので、毛利、福島、浅野三代、二百八十年間の居城でございましたが、(続きは、「原爆による被害」欄内)	惜しくも、原爆により、石垣と内堀の一部を残しただけで、焼けてしまったのでございます。		このお城を中心に、第五師団司令部、歩兵十一連隊、野砲連隊、陸軍幼年学校、陸軍病院等がございました。尚、この城内には、日清戦争の際、明治天皇が、ここに大本営をお移しになり、見るからに寒い御座所に、不自由を忍びながら、一切の軍機を統帥されていたのでございます。大本営はあの天守閣と共に、国宝に指定され、ひろしまの歴史を物語る貴重な史跡でございましたが、原爆を受けて、今では、礎石に名残りをとどめているだけでございます。尚、あの日、大本営の写真が、後世に伝えます平和記念資料館に陳列してありますから、御覧になって下さい。	前に見えております明るいお社は、広島護国神社です。(始めて建てられたのは、明治元年で、昭和九年に再建されたお社は、原爆を受けて焼けてしまったので、昭和三十一年十一月、ここに工費五千万円で、三度建てられました)鉄筋コンクリート造りの燃えないお社でございます。 広島県出身の方々で、戊辰の役を始め、日清、日露、太平洋戦争の戦死者と、原爆で亡くなられた、学徒義勇隊員など、戦争犠牲者、八万四千七百三十八柱の精霊がお祀りしてあります。毎年春と秋には盛大なお祭りが行われ、多くの参拝客で賑わっております。平素は、高砂やこの浦舟に帆を上げてと御書の契を結ぶ、結婚式場に使われております。 ここでは車から降りて頂きまして、大本営跡と天守閣へ御案内します。 御手廻りの荷物は、そのままよろしくございますが、乗車券だけは、天守閣入場が必要ですから、必ずお持ちになって下さい。尚、この出発時間は〇時四十分です。時間に遅れますと他のお客様の迷惑になりますので、出発時間は固くお守り下さいませ、お願いいたします。 では、御案内しましょう。先に降りられた方は、しばらくお待ちになって下さい。
昭和48年	今から約400年前の天正17年、毛利輝元公は、祖父元就公の命を継ぎ、中国九十九国の大宰にふさわしい城を造ろうと叔父、小早川隆景と共に計画をすめました。そして三年目に出来上り、広島城と名付けたのでございます。	五層36メートルの天守閣、太鼓櫓と三つの城門で固められたこの城は、毛利、福島、浅野三代、二百八十年間の居城でございましたが、(続きは、「原爆による被害」欄内)	惜しくも原爆により石垣と内堀の一部を残しただけで焼けてしまったのでございます。		このお城を中心に第五師団司令部、歩兵十一連隊、野砲連隊、陸軍幼年学校、陸軍病院等がございました。尚、この城内には、日清戦争の際、明治天皇が全軍を指揮された大本営跡がございます。	
昭和57年	天正17年、毛利輝元公は、祖父元就公の命を継ぎ、中国九十九国の大宰にふさわしい城を造ろうと叔父、小早川隆景と共に計画をすめました。そして三年目に出来上り、広島城と名付けたのでございます。	五層36メートルの天守閣、太鼓櫓と三つの城門で固められたこの城は、毛利、福島、浅野三代、二百八十年間の居城でございました。	天守閣は昭和6年に国宝に指定されておりましたが、昭和20年の原爆により、石垣と内堀の一部を残しただけで焼けてしまったのでございますが、		このお城を中心に、かつては、第五師団司令部、歩兵十一連隊、野砲連隊、また陸軍病院等がございました。なお、この城内には、日清戦争の際、明治天皇が全軍を指揮された大本営跡がございます。	
昭和60年	毛利輝元公は、祖父元就公の命を継ぎ、中国九十九国の大宰にふさわしい城を造ろうと叔父、小早川隆景と共に「五ヶ村」と呼ばれていたこの地に計画をすめました。そして天正19年、二年目に出来上り「広島城」と名付けたのでございます。	五層36メートルの天守閣、太鼓櫓と三つの城門で固められたこの城は、毛利、福島、浅野三代、二百八十年間の居城でございました。	昭和20年の原爆により、石垣と内堀の一部を残しただけで焼けてしまったのでございます。		明治27年の日清戦争の際、城内に「大本営」がつけられ、明治天皇を迎えて、帝国議会議場が置かれたなど、終戦迄、お城を中心に第五師団司令部、歩兵十一連隊、野砲連隊、陸軍幼年学校、陸軍病院等がございましたが、(続きは、「原爆による被害」欄内)	左手の大鳥居は広島護国神社の鳥居で、広島城跡と、大本営跡への東入口でございます。
平成3年	毛利輝元公は、祖父元就公の命を継ぎ、中国九十九国のお城にふさわしい城を造ろうと叔父、小早川隆景と共に「五ヶ村」と呼ばれていたこの地に築城を始めました。そして二年後の天正19年(1591)に完成し「広島城」と名付けたのでございます。	しかし、十年後の関ヶ原合戦に西軍に味方して敗れたため長州(山口県)に移され、二代目藩主正則も、幕府に無断で城を直した事と認められ、信州(長野県)に移されました。その後、浅野長政が紀伊和歌山から移って参りまして14代も続きました。	昭和20年の原爆により石垣と内堀の一部を残して焼けてしまったのでございます。		明治27年の日清戦争の際には、城内に「大本営」がつけられ、明治天皇を迎えて、帝国議会議場が置かれたなど、終戦迄、お城を中心に第五師団司令部、歩兵十一連隊、野砲連隊、陸軍幼年学校、陸軍病院等がございましたが、(続きは、「原爆による被害」欄内)	左手の大きな鳥居は、広島護国神社の鳥居で、広島城跡と大本営跡への入口でございます。
平成11年	広島市発展の基礎を築いた輝元公は、毛利元就の孫ですが、輝元36歳の時、瀬戸内海の重要性を考えて「広島城」を築き(天正17年(1589)から二年をかけて)112万石を支配しました。	五層五階の天守閣の高さは、石垣を含めて36メートルです。江戸時代初期の広島城は内堀、中堀、外堀という三層の堀をめぐり、太田川も天然の堀とすると、秀吉の築いた大阪城にも匹敵するといわれています。 しかし十年後に起きた関ヶ原の合戦に敗れて山口県(長門)萩市に移され、代わって入城した福島正則は、幕府の許可なく石垣を直したことを理由に、19年間いた広島を追われて長門県(厚狭川中島)に移されます。その後、紀伊国・和歌山の浅野長政が広島城主となり、明治維新までの250年間、42万石の城下町として栄えました。	原爆により、国宝の天守閣を始め城内にあった建物は全て倒壊し、現在、私たちが目にする事ができる広島城は、本丸と二の丸と内堀しか残っておりません。		明治27年の日清戦争の際には城内に「大本営」がつけられ、明治天皇を迎えて広島で臨時の国会(臨時帝国議会)が開かれたなど、殆どが軍隊のために使われ、一般の人々には自由に出入りしてはできなかったそうですが、(続きは、「原爆による被害」欄内)	左手の大きな建物は「広島護国神社」の鳥居で、被爆建造物の一つです。市民球場の近くで被爆し、戦後広島城内に移ってまいりました。鳥居の奥に、広島城の石垣が見えております。

表 3-2 広島城関連の観光案内内容の変遷（筆者作成）

案内対象 内容項目	広島城本丸、二の丸	二の丸	二の丸	広島城内堀	広島城周辺
案内内容の示す時期による分類 前：原爆投下前、中：原爆投下時、直後、後：原爆投下後	内堀の石垣、天守閣	天守閣	二の丸	内堀	内堀の整備
	後	後	後	前	後
	後	後	後	前	後
昭和29年～35年 (昭和37年発行ガイドテキストと異なる部分のみ、バスガイド退職者へのインタビュー聴取データより抜粋した。昭和37年と同様の案内内容部分は簡略化している。)	(昭和37年と同様の案内内容)	(昭和33年天守閣復元以降、昭和37年と同様の案内内容)		(昭和37年と同様の案内内容)	焼け野原が原で復興してたところをあそこが何ですよ、ここですよ。で、原爆ドームですよ。今からドームの中に案内いたします。でここが西練兵場の跡で、多くの兵隊さん達がいたんですよ。よく晴れた日には宇品港が見えてましたから、多くの兵隊さん達が眺めて、万歳万歳という声も高らかに送られていったとか。敗れて帰ってきたときには港から帰ってきます。明治天皇がお通りになって懐いた、御幸松海の玄園の平品港の話をして、千田貞純という人が、私財を投げ出して、港がないから造りました。あの神合いが何ですよ。
昭和37年	正面に見えて参りました石垣は、広島城内堀の石垣です。	目の前にそびえております白壁の建物は、五層三十六米、広島城の天守閣です。終戦後長い間、天守閣のない淋しい城跡でございましたが、昭和三十三年三月、工費三千五百万円で作られた、ようやく昔の偉容を偲ぶ事が出来る様になりました。		輝元公が造られたこの内堀の石垣とお堀の水は、三百年、今も昔も変わらず何事かを語り続けている様です。天上影は変われど、栄枯は移る。世の姿遠く歴史を振り返る時、人の世の移り変りの哀れさをひしひしと感じさせるのでございます。	右手は、広島中央バレーコート、左手はテニスコートです。この辺り一帯は、終戦迄、西練兵場といわれて、兵隊さん達の練習場でしたが、現在では、御覧のように、県庁を始め諸官庁の高層ビルが立ち並び、行政と通信活動の中心地となっております。
昭和48年	右手正面に、戦後復興された広島城が見えて参りました。	目の前にそびえております天守閣は、五層三十六メートルございます。終戦後長い間、天守閣のない淋しい城跡でございましたが、昭和三十三年三月、工費およそ3500万円で作られた、ようやく昔の偉容をしのぶ事が出来る様になりました。現在天守閣は、広島城の歴史を物語る郷土館となっております。		輝元公が造られたこの内堀の石垣とお堀の水は、今も昔も変わらず何事かを語り続けている様です。天上影は変われど、栄枯は移る。世の姿遠く歴史を振り返る時、人の世の移り変りの哀れさをひしひしと感じさせるのでございます。	右手は、市営バレーコート、左手は、テニスコートです。この辺り一帯は終戦迄、西練兵場といわれて、兵隊さん達の練習場でしたが、現在は御覧の様に、県庁を始め諸官庁の高層ビルが立ち並び、行政と通信活動の中心地となっております。
昭和57年	左手に、戦後再建されました「広島城」が見えて参りました。	昭和33年に再建され、内部は郷土館として、郷土資料、美術工芸品などが展示されております。		*天上影は変われど、栄枯は移る。世の姿、うつさんとて、今も昔も変わらず、何事かを語りかけてくる様でございます。	左手背の建物は、県立体育館でございます。右手は広島中央図書館、ついで右手内形建物は広島美術館でございます。この辺り一帯は終戦まで西練兵場といわれて、兵隊さん達の練習場でしたが、現在は御覧の様に県庁を始め諸官庁の高層ビルが立ち並び、行政と通信活動の中心地となっております。左手前方の建物は、中央官庁の出先機関が集まる広島地方第一、第二合同庁舎でございます。左手の白い建物は、社会保険広島市民病院でございます。
昭和60年	左手を御覧下さいませ。広島城の天守閣が見えております。	天守閣は昭和33年に復元されまして、内部は郷土館として郷土資料、標本、武器等数千点(2300)が展示されております。			この辺り一帯は、終戦まで西練兵場といわれて、兵隊さん達の練習場でしたが、現在では行政と通信活動の中心地となっております。左手前方の建物は、中央官庁の出先機関が集まる広島地方第一、第二合同庁舎でございます。
平成3年	バスの中から左手をご覧くださいませ。内堀の向うに広島城の天守閣が見えております。	昭和33年の春に天守閣は復元され、国の史蹟に指定されました。	平成元年、広島城は築城400年を迎え、それを記念して「平成の築城」でも言える大掛かりな整備事業に乗り出しました。やがて、江戸城、大阪城と並ぶ名城と言われた「鯉城」の雄大な姿を見せてくれる事でしよう。		この辺り一帯は「西練兵場」の跡でございます。終戦まで広島城を中心に軍隊の施設が建ち並んでいましたが、今はセンタービルや官公庁、市営アパート等が建ち並び、広島市中心街でございます。
平成11年	バスの中から左手をご覧くださいませ。内堀の向うに鯉の城「鯉城」と呼ばれる「広島城」の天守閣が見えておりますが、下車はいたしませんので、写真はバスの中からお願いたします。	ご覧いただいております広島城は、昭和33年の春に復元され、国の史蹟に指定されております。	続いて、平成元年に復元された二の丸が見えてまいります。広島城の本丸を守るために建てられたもので、ご門櫓、表ご門をくぐりますと、手前が平櫓、多門櫓、太鼓櫓と続いております。広島市制百年と築城四百年を記念して復元されたもので、長さ76メートルの外堀が内堀に優雅な姿を写しております。左手の突き当たり、広島城の二の丸が見えてまいります。平成元年に築城四百年を記念して建てられたご門櫓・表ご門・多門櫓・太鼓櫓が、内堀に優雅な姿を写しております。		広島城を中心とするこの辺り「西練兵場」の跡でございます。明治二十七年の日清戦争の時には城内に大本営が置かれ、明治天皇を迎えて帝國議會が開かれたなど、終戦までお城を中心に第五師団司令部、歩兵十一連隊、野砲連隊、陸軍幼年学校、陸軍病院などが建ち並び、一般の人は自由に出入りができなかったのでございます。今は商店や官公庁、市営アパートが軒を連ねる広島の中核でございます。

5. おわりに

以上より、名所広島城の施設整備、運行系統、案内内容の変遷についてそれぞれ分析を行った結果、都市のアイデンティティの形成や持続の問題について、以下のことが明らかとなった。

1) 観光案内における天守閣からの眺望の喪失：昭和43年、コース全体の時間短縮のために時間の要する天守閣見学が中止され、天守閣に観光客が登らなくなったことにより、広島城からの都市の俯瞰景を眺めることができなくなった。しかし、天守閣に登らなくなった昭和48年には少なくとも、仮に天守閣に登り、都市を眺望すると、城下町の成り立ちや広島城周辺や市街地の軍用施設、軍用地、また軍港であった宇品港との関係を空間的に把握することができ、同時に、都市の生成過程の中での広島城を時間的に位置づけることができる。しかし、天守閣見学が削除されたことによって物理的に都市を眺望することができなくなり、以上のように都市像を理解することはできなくなった。

一方で、前稿で言及した比治山については、比治山展望台から瀬戸内海が直接見ることが不可能となった後にも、暗示説明²⁹⁾、つまり見えない対象物の方向を指し示し、観光客に対象物を想起させながら案内をする形式を用いている。このように、観光案内にとつて、また観光客の都市広島のイメージ形成に重要であると観光業者側が思う対象物については、暗示説明という形式をとりながらも、継続して案内を行っている。少なくとも、広島城においても昭和29年から35年には天守閣からの眺望についての暗示説明がされていた。しかし、昭和37年以降、天守閣からの眺望（広島市街地や原爆ドームなど）が得られるか得られないかに関わらず暗示説明を用いることはない。このことの要因の一つとして、広島城の他に比治山という都市への俯瞰景が眺められる場所が、運行系統の中の経由地点として含まれており、広島城よりもよい眺望を得ることができたことが考えられる。比治山からは瀬戸内海から中国山地にかけて、市街地とその周辺を一望することができ、バスガイドが特に語りたいと願う戦後復興の様子についての視認が比較的容易である。

したがって、天守閣からの眺望の喪失により、広島城という場所において認識される都市の時間性、空間性は断絶したといえる。

2) 観光の意味における軍都広島のイメージの継続：軍都広島を中心であった広島城において、その歴史は戦後の都市復興整備による文化施設建設などにより消されていく。同時に、定期観光バスにおいては運行系統の変更により、昭和48年以降は天守閣を内堀外から停車案内により眺めるのみとなっていく。一般的に観光案内においては、観光客の目に見え、理解しやすい対象物を優先して案内するという傾向があるため、目に見える天守閣や石垣、堀のみの案内となるのが当然のように考えられる。もちろん、一般的に城の歴史において語られるであろう、築城時代の歴史については多く語られ続ける。しかし一方で、イデオロギー色を極力排することが求められる定期観光バス案内においても、軍都広島が継続的に語られ続けている。これは、軍都広島の時期も都市の歴史の一部であるということと、また日本の主要軍都であったことも、都市広島のアイデンティティの一つと捉えていると考えられる。

このように観光的名所としての広島城においては、被爆前の歴史が重視され、特に近年の観光案内では、広島城の築城時代、戦時中という歴史的断面が局所的に抽出され、特に強い印象を持たされていると考えられる。つまり、国際平和文化都市観光において、広島城は外から眺める対象へと限定され、桜の名所へと変化した場所として現在の広島の平和については語らずに、築城時代、軍都時代の歴史を語る場所へと特化されていったのである。

謝辞

本研究では、広島バス株式会社の方々とそれに関係する方々の協力のもとにインタビュー調査や資料収集を行いました。ここに記して、感謝の意を表します。

注

- 1) 広島市が観光客へのアンケート集計結果、現状の観光施策の問題点、今後の課題などをまとめている「広島市の観光概況」（昭和51年～現在）の昭和57年版（p.46、昭和58年3月発行）「VI課題と今後の対応」において、「全世界の人々が求め続ける世界平和の原点としてのヒロシマの知名度と使命を持ち、国際平和文化都市をめざして都市建設を進めている本市は、世界に開かれた都市として、国際的な会議が開催できる都市機能を整備する必要がある。」と記述されており、具体的に広島市を「国際平和文化都市」と位置づけようとする意図がみられる。
- 2) シークエンス景観や俯瞰景などにより都市を点的ではなく面的に眺め、都市全体を観光することができるバス観光の中でも、定期観光バスは広島観光案内の原型となるものである。なぜなら、定期観光バスは広島を広く浅く紹介することを目的とし、企業のPRになるような案内やある種のイデオロギーを含むような内容は避け、偏りのない案内となっているからである。一方、同じバス観光の中でも修学旅行や社員旅行などの貸切旅行の客も広島市には多く訪れているが、これらは各団体の性格や意図を大きく反映する案内となり一般性に欠ける。また、広島バス株式会社の現役バスガイドへのインタビュー調査によると、他都市から来る貸切バスのバスガイドの多くは、広島定期観光バスの観光案内を自社での案内の参考にしている。
- 3) 横山尚・千代章一郎：「第二次世界大戦後における名所比治山の変遷—広島市における定期観光バスを通して—」、日本建築学会計画系論文集、第613号、2007年3月、pp.267-274
- 4) 橋本秀夫：「広島城修復史の一考察」、広島市公文書館紀要、第20号、1997、pp.61-69
- 5) 仲勝利：「明治初期に城址で開催された博覧会に関する研究」、日本都市計画学会都市計画論文集、No.41-3、2006.3/松浦健治郎・浦山益郎：「近世城下町を基盤とする軍都5都市における明治期の官庁街形成と都心改編」、日本都市計画学会都市計画論文集、No.37-84、2002/橋寺知子・川道麟太郎：「明治初年に大阪城址に設置された近代的諸施設について」、日本建築学会計画系論文集、第568号、2003.6、pp.179-184
- 6) 木下直之：「近代日本の城について」、近代画説 明治美術学会誌、第9号、2000.12、pp.80-99/平井聖：「現代の城郭復元」、復元大系日本の城9 城郭の歴史と構成、1993.8、pp.156-157
- 7) 広島バス株式会社：観光案内テキスト（市内編）、1962.2/広島バス株式会社：観光案内テキスト市内編、1973.2/広島バス株式会社：観光案内（広島都心編）、1982.1/広島バス株式会社：観光案内テキスト（広島市内編）、1985.3.1/広島バス株式会社ガイド教育センター：広島市内、1991.3.1/広島バス株式会社ガイド教育センター：定期観光テキスト、1999
- 8) バスガイドは観光案内時にガイドテキストを基礎資料とするほか、話題性や新奇性の高いもの、また歴史的事実などの情報を個人で付け足して、観光演出を行う。そのときの参考資料の一つが、新聞（殆どが中国新聞社発行の「中国新聞」の朝刊、夕刊）を切り抜いて作成したスクラップブックである。これは、バスガイド退職者が、バスガイド時代、バスガイド教育者時代に収集したものである。
- 9) 昭和29年～35年に広島定期観光バスに勤務していたバスガイド退職者へのインタビュー調査を行った。ガイドテキストは現存しないため、記憶を辿りながらの回答であるが、この時期のみの勤務であったため、他の時期の案内と交錯することは少ないと推測される。この時期の案内内容は、昭和37年発行ガイドテキストの内容とほぼ等しく、異なる内容についてはインタビュー対象者が覚えている範囲で回答した。
- 10) 広島バス株式会社は広島市で唯一の定期観光バスを運行しているバス会社であり、昭和29年から現在まで運行している。
- 11) 国土地理院：一万分の一地形図「広島」、1957、1972、1987、1992、2001

- ゼンリン：『ゼンリンの住宅地図広島市中区東区南区西区』、1981
 ゼンリン広島：『ゼンリン住宅地図 2001 広島市東区南区』、2001
 中国地図出版株式会社：『戸別記入広島市精図』、1966
 広島市：『一万分の一地形図、1967. 12、1971. 6
- 12) 広島市：『河岸の戦後史』、全 12 巻、1985-2001／広島市：『広島新史』、全 12 巻、1984／広島市：『被爆 50 周年 図説戦後広島市史 街と暮らしの 50 年』、1996／広島都市生活研究会編：『広島被爆 40 年史 都市の復興』、1985／広島市段原公民館：『写真で見る比治山今昔』、1998. 3
- 13) 広島城に関する歴史年表は以下の資料を参照している。中国新聞社編：『広島城四百年』、1990. 5. 1／広島市：『河岸の戦後史 4 本川』、1988. 3／広島護国神社：『広島護国神社戦後復興誌』、1983／(財)広島市歴史科学教育事業団 広島城：『天守閣再建物語～広島城の戦後～』、1993. 6
- 14) 広島県：『明治二十七八年戦役広島大本営誌』、pp. 27、1934
- 15) 中国新聞社：『広島城四百年』、pp. 235、1990. 5
- 16) 天守閣内で行われた記念展覧会については二階部分内部の写真が残っているのみである。天守閣の何階で展示が行われていたかは不明であり、天守閣から市街地が眺められたかはわからない。
- 17) 「広島招魂祭」という大規模な祭りが開催され、同時に伝統的な祭りが精彩を欠いていった理由について中国新聞社発行『広島城四百年』の中に「二葉の里にあった招魂社（現・広島護国神社）が昭和九年、西練兵場の一角に鎮座したのと、戦争が激しくなったかららしい。それはすごい人出だった」（広島護国神社宮司）と記されている。
- 18) 木造天守閣が保存されず、壊された理由として、この木造の天守閣が一时的な建物として建てられたこと、全国的な天守閣復元ブームでは天守閣の不燃化が求められていたことが推測されるが、参考文献にこのことに関連する記述はみられない。
- 19) 防災上、再び木造で天守閣を復元することはできなかった。この時期に全国で復元された天守閣の殆どは、鉄筋コンクリート造であった。
- 20) 広島城天守閣の復元についての議論の詳細については、下記資料から以下のようにであったことがわかる。市議会全員協議会において議会側、渡辺忠雄市長側から広島城復元の案が出され検討された。しかし、広島県の文化財委員会は反対論が支配的で、「広島城跡の文化財的価値は、原爆で廃墟となったという歴史的事実にあり、復元しても文化財としての価値をプラスすることにはならない」との見解だった。それでも、市側が強く承認を求めたため、長い議論の末、同意した。参照資料：広島市：『広島復興大博覧会誌』、1959. 4／中国新聞社：『広島城四百年』、1990. 5
- 21) 広島中央公園の都市計画決定は昭和 23 年 11 月 1 日であるが、その後、規模が徐々に縮小されていく。現在の広島中央公園の原型となり得ると推測される具体的な計画は以下のものである。日本公園緑地協会：『広島中央公園計画』、1967
- 22) 広島城の整備計画については、以下の資料を参考とした。広島市教育委員会：『史跡広島城跡保存管理計画書』、1988. 4／広島市教育委員会：『史跡広島城跡整備基本計画』、1989. 3
- 23) 千代章一郎・横山尚：「広島定期観光バスにおける運行系統の変容」、日本都市計画学会学術研究論文集、No. 38-3、pp. 685-690、2000. 10
- 24) 表 2 作成にあたり、周辺建物の建設年などは以下の資料を参照した。広島市都市計画局都市計画部都市デザイン室：『都市広島 1945-1995 & The Future—都市デザイン 50 年の軌跡と新たな風景づくり—』、1996. 3. 31
- 25) 広島バス株式会社作成：「一般乗合旅客自動車運送事業計画変更（運行時刻及び運行系統別配置車両数）認可申請書」、1968. 2. 29。「3. 変更を必要とする理由 昭和 29 年に市内定期観光の免許を戴き、全国各地よりの旅客の利用状況、列車の時間等、色々の制約により現在の形態に於いてサービスに鋭意努力を続けておりますが、観光旅客を始めとし、幹旋業者よりも旅行日程の関係により市内観光を 2 時間に短縮してほしいとの要望が強く、弊社としても旅行日程に即応した観光ルートに変更し、1 人でも多くの人々が利用し満足して戴けるコースにすべく別紙運行系統表の通り、広島城の入館を廃止し、市内観光 2 時間のコースにより変更致したく、本申請に及んだ次第であります。」
- 26) 広島市：『被爆 50 周年 図説戦後広島市史 街と暮らしの 50 年』、p. 103、1996
- 27) 表 3 中の文章は、各年代のガイドテキスト（注 7）、バスガイド退職者へのインタビュー聴取データから抜粋したものである。
- 28) 広島市：『河岸の戦後史 4 本川』、pp. 63-64、1988. 3
- 29) 本研究で定義した広島定期観光バスにおける説明形式については以下の論文を参照。千代章一郎・横山尚：「広島定期観光バスにおける眺望対象の変容」、日本建築学会計画系論文集、No. 581、pp. 227-234、2004. 7

(2007年2月2日原稿受理, 2007年8月10日採用決定)